

## 波路はるかな島々の生活が目浮かぶ

(財)日本地図センター 野々村邦夫

### 日本に宝島がある！

日本にも宝島がある。もしそのことをご存じでなければ、地図帳で探してほしい。大きな島とはいえませんが、面積7.1km<sup>2</sup>(国土地理院公表数値)の宝島は、たいていの地図帳で見つけることができる。たとえば、帝国書院『楽しく遊ぶ小学生の地図帳(最新版)』なら、p.12。屋久島と奄美大島との間に点々と吐噶喇列島の島々が連なり、その中の一つに宝島があることを確認していただけるだろう。行政区域としては、鹿児島県鹿児島郡十島村になる。

実は私は、この島の地図を作ったことがある。もちろん私一人で作ったわけではないが、1968年(昭和43年)3月、宝島へ上陸し、現地調査を行い、航空写真撮影に必要な対空標識を設置した。2万5000分の1地形図としてはわが国最初の「宝島」は、1972年(昭和47年)6月に発行されたが、その作成作業の中で私は、そういう仕事をした。この2万5000分の1地形図が発行されるまでは、1930年(昭和5年)測図、1953年(昭和28年)12月発行の5万分の1地形図が、もっとも縮尺が大きい地形図だった。それと比べれば、情報は新しくなり、精度も格段によくなったといえよう。

### 吐噶喇列島へ出張

私が地形図作成に必要な現地調査などを行うため、吐噶喇列島のうちの4島、口之島、中之島、小宝島、宝島へ出張したのは、1968年(昭和43年)の3月から4月にかけてのことだった。約40日間、現地に滞在した。その前年の4月、国土地理院に採用された私は、測図部地形課へ配属され、2万5000分の1

1地形図の作成作業に従事していた。社会人になって1年に満たない、新米技官のときである。吐噶喇列島へ出張を命ぜられたものの、それがどこにあるのかも知らなかった。「社会科地図帳」で調べてみて、冒頭に書いたようなことを知ったしだいである。

### 海は荒海

吐噶喇列島へは、鹿児島港から第20島丸という253トンの小さな貨客船に乗って行った。この船は、十島村の村営船である。過疎の離島を結ぶ航路は採算が合わないから、そんなことを引き受ける民間の船会社はなく、九州から吐噶喇列島の島々へ行くには、また、島同士を行き来するにも、これが唯一の交通手段だった。

第20島丸は、吐噶喇列島の有人島を巡回しながら鹿児島港と奄美大



帝国書院『奨学生の地図帳(最新版)』p.12~13

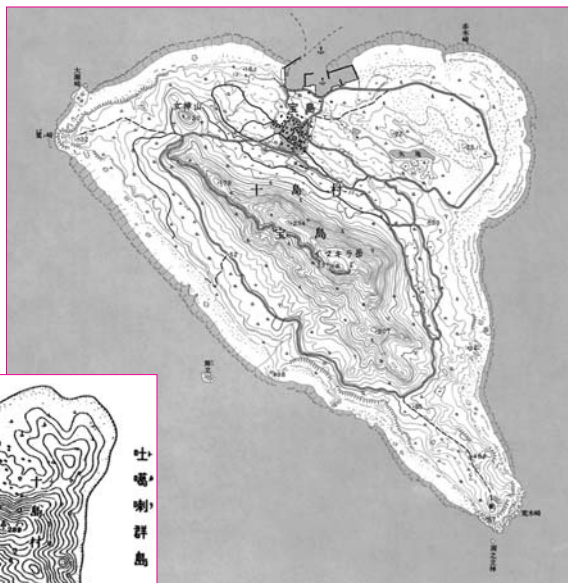
島の名瀬港との間を往復していた。順調に航行しても、片道に1週間近くかかった。当時はどの島にも、この小さな船でさえ接岸できる港はなかった。島での乗船下船は、舢舺に頼った。

第20島丸の船旅は、揺れに揺れた。中之島の調査を終え、次の目的地である小宝島へ移動したときは、荒波に翻弄されながら52時間の船旅をした。船が大波にぶつかると、バンヤーンという大きな音とともにガバーツと持ち上げられ、続いてスーツと落下する。体感重力が、プラスマイナスに大きく変化する。こんなことをしつこく繰り返されると、青息吐息で船室の床に横たわっているしかなかった。寄港地の島に近づいても、荒天のため舢舺を出すことができず、風下の島影で停船し、天候回復を待つということもあった。やつのことで上陸しても、地面が揺れているようで、地に足が着かないという感じだった。2日2晩かかったこんな航海中、1度も嘔吐しなかったのが不思議なほどだ。

## 孤島は楽園

島に上陸すると、自生しているバナナやガジュマルの木とか、サトウキビ畑とか、私にとっては珍しい南国風景を見ることができた。中之島と小宝島には温泉があり、現地調査で歩き回った体が癒された。食事は、毎日同じような魚ばかりで単調だった。牛肉を食べたことは1度もなく、豚肉を食べたのは1回だけ、パンを食べたのは小中学校で給食用に焼いていたものもらったときだけ、というような、振り返ってみればあまり恵まれた食生活ではなかったが、そのときはそれほど不満に思わなかった。島の人たちと焼酎を酌み交わすことも多かった。行きずりの見知らぬ人々から、「こんにちは」と挨拶されることも多かった。日に日に島の生活に溶け込んでいったが、結局は後ろ髪を引かれる思いで島を後にするというのが4回、つまり、訪れた島の数だけ繰り返された。

国土地理院1/25,000地形図『宝島』  
(昭和45年測量、平成3年修正、平成4年発行)  
※60%に縮小



国土地理院1/50,000地形図『宝島』  
(昭和5年測図、昭和28年発行)  
※60%に縮小

いつの間にか覚えてしまった「波路はるかな300キロの、海に連なる島々よ。強い日差しに緑の木々が、夢と希望を呼びかける。十島、十島、我らの十島」という十島村の歌は、今でも忘れていない。

## 地図帳の上で懐かしむ

あれから30数年経つが、その後吐噶喇列島へ行ったことはない。十島村のホームページを見ると、各島には大きな船が接岸できる港が整備され、立派なフェリーが就航しているらしい。私が行ったころは皆無に近かったが、今では多くの観光客が島々を訪れているようだ。

地図帳で見る吐噶喇列島は、小さい。しかし、その小さな島々で人々が元気に生活をしている。地図帳を見ながら私は、そう実感する。